

はしがき

国家が軍事力を行使する理由は多々ある。その一つに、自らにとつて理想の国際秩序を実現するため、というのが考えられる。ある国家が現状の国際秩序に満足せず、その変革をかたくに望んだ場合、その「ある国家」は現状打破国家と化し、戦争に訴えることによつて新秩序を構築しようと邁進する。第二次世界大戦（以降、第二次大戦）においては、ドイツがその現状打破国家であつた。中東欧を席卷して勢力圏に組み込み、ヨーロッパでドイツを中心とした国際秩序を構築しようとしたのである。ヨーロッパの現状維持を追求していたイギリスとフランスは、そうした国際秩序の誕生を阻止すべく、ドイツに対し宣戦を布告した。

この戦争では、ドイツの攻勢によつてフランスが一九四〇年六月、早々と敗れたのに対し、イギリスが徹底抗戦を貫いたことで複雑化し、戦いは長期化した。国際秩序を破壊しようとする行為は諸刃の剣である。ドイツからしてみれば、既存の国際秩序を破壊できれば新秩序構築の目標に一步近づくことになる。しかし、失敗し、敗れた場合、覇権的地位の確立が不可能となるだけではなく、制裁を加えられ、国力を大幅に縮小させられる可能性が大きい、それは危険な賭けであつた。ドイツはフランスを休戦に追い込んだ後、イギリスも早々に屈服させるか、停戦に合意できるものと期待していた。

フランスの政治指導者も、自国に続きイギリスが敗けると踏んで、枢軸陣営のドイツと途中から参戦したイタリヤとの間で休戦協定を締結した。ドイツを軸とした国際秩序が誕生し、そのなかで「名誉ある地位」を得ることを

期待したのだ。フランス政府も賭けに出たのである。しかし、その目論見は外れた。さらに事情を複雑にしたのがフランスには、この敗北を認めない人々が階層や職業を問わず、ある程度の勢力として存在したことである。そこから誕生したのが枢軸陣営に対する抵抗運動である。

この抵抗運動の活動拠点、フランス国内のみならず国外にもあった。ロンドンを拠点に国外抵抗運動の自由フランス (La France libre) を立ち上げたのが、ド・ゴール (Charles de Gaulle) という軍人である。ド・ゴールは、最終的にドイツが敗れると考え、政府の決断に異議を唱えた。ようするに、自由フランスもまた賭けに出たのである。一九四〇年七月からヴェイシーに拠点を構えるフランス政府と自由フランスとは、戦後ヨーロッパ国際秩序に関する見方が大きく異なっていた。フランスに残って政府に参加した面々の多くは、最終的にドイツがイギリスを打倒することを前提に、休戦協定を遵守し、ドイツを中心としたヨーロッパ地域のみでフランスを生存させることを模索した。

では自由フランスは、いったいどのような戦後国際秩序を構想したのか。本書の課題は、この質問に答えることである。本書では自由フランスと、そこから派生した国外抵抗運動の系譜によって立案された戦後国際秩序構想をめぐる問題に取り組んでいく。

結局、自由フランスが賭けに勝ち、ド・ゴールが戦後フランスへの道筋を開拓することになった。今日のフランスの原点がこの時代にある。

つまり、ドイツに屈服したフランスが戦勝国として第二次大戦を終えることができたのは、自由フランスのおかげである。自由フランスが存在しなかった場合、今日、フランスが国際連合の安全保障理事会の常任理事国になっていなかった可能性がある。あるいは、そもそも大国として復活せず、一九四〇年六月の敗戦を引きずったまま、「戦勝国の国際秩序」に反発し続けていたかもしれない。現実には、以上のようなことが起きなかったわけであり、この敗戦と戦勝の連鎖に第二次大戦期フランス史の特異性がある。

そしてこの特異性にこそ、政治学、あるいは国際政治論の研究対象として、この時期のフランスを分析することの意義がある。どうして、戦争の序盤に敗けた国家が戦勝国になれたのか。それは、枢軸陣営から連合軍陣営に寝返ったというような単純な話ではない。

第二次大戦期のフランス史を見ると、枢軸陣営寄りの政策を展開したヴィシー政府もあれば、連合軍とともに戦った自由フランスもあったのである。そして、双方が「われこそはフランスを代表している」と正統性を主張したところに根源的な問題の原因がある。詳細は本書のなかで論じるが、ようするに、国際政治の舞台でフランス代表を主張するアクターが二つ存在し、対立していたのである。国土の南北に分かれて、それぞれの地域を代表するというような状況ではなく、ヴィシー政府も、自由フランスも同じフランスを取り合った。それゆえ、国際政治の舞台では、カッコ付きの「フランス」として扱われた。いったいどのアクターが、そして、どの指導者がフランスの名において話していたのであろうか。この点が曖昧になった。そうした曖昧な状況が続いた結果、フランスは国家として弱体化し、没落する羽目に陥ったのである。

しかし、フランスは、自由フランスやその周辺組織の働きによって、終戦時には没落から驚異的な立ち直りを見せていた。これは、連合軍陣営に属し、戦闘に参加するだけでは成し遂げられないものであった。戦後に向けた対応策を練り、そのための外交を展開したからこそ再興したのである。ド・ゴール等は戦後フランス像を描くだけでなく、フランスを取り巻く戦後国際秩序を構想し、フランス再興への道を必死に探したのである。

だが、構想を実現させることは途方もない難題であり、ド・ゴール率いる「フランス」が構想を実現させたとは言いがたい。では、なぜ再興できたのか。その答えは、構想を分析しただけでは、そして自由フランスの創設者であるド・ゴールを見ているだけでは出てこない。つまり、最終的な構想実現の有無にのみ注目すればよいというわけでは必ずしもなく、その実現に向けた過程のなかで、何を勝ち取り、何を喪失したのかということに注目する必要があるのだ。

戦後国際秩序構想とは、いわば戦後に向けた理想像であり、理想とはいまだ存在しない「何か」である。戦後国際秩序は一国のみで実現に漕ぎつけるようなものではない。それを実現させようとした場合、必然的に複数の国家を巻き込むことになる。ましてや脆弱な自由フランスが構想したところで、それは所詮「絵に描いた餅」に過ぎない。それゆえ、本書では構想の分析にとどまらず、構想をめぐる外交も分析の対象に含めた。理想としての戦後国際秩序構想は、外交という現実には採られたのである。

そして、その構想の立案には多くの人間が携わった。第二次大戦期のフランス史においては、ド・ゴールに視点が集中しがちだが、時を経るに従い、制度化を進めた国外抵抗運動は巨大なアクターに成長した。そこには多くの政治エリートが集い、そのなかから戦後フランスを取り巻く国際秩序に積極的に眼差しを向けるようになった面々がいた。彼らを見ずに本書のテーマを論じることはできない。

国外抵抗運動に集った政治エリートは、戦争という困難な状況のなか、戦後に向けてどのような国際秩序を構想したのであるか。本書のなかで、具体化された構想を分析の対象とするのは第6章や第7章である。しかし、まったく制度化されていない状態から誕生した自由フランスがそこまでに至るには、まず構想作業を行うための組織をつくらなければならなかった。政府的機構の構築から始まり、戦後に向けた作業に従事する専門委員会など、制度化という過程を経なければならなかったのである。さらに、第5章で扱うような政治エリートの権力闘争も経なければならなかった。第二次大戦期のフランス史とは、国家を代表する正統なアクターの地位をめぐる闘争の歴史でもあった。そうした闘争は、自由フランスとヴィシー政府との間だけではなく、抵抗運動内でも繰り広げられたのである。

複数のアクターが正統性を求めて争い、そこで勝ち残ったアクターが戦後に思いを馳せ、国家再興の構想を練り、国際秩序の構想を練る。第二次大戦期の「フランス」を見ていくことで、権力の追求、あるいは理想の追求といった政治学の根源的な問題の一端を国際政治論の文脈のなかで研究することができるのだ。

目次

はしがき i

略語表 xi

序章 「戦勝国」と「敗戦国」の狭間

はじめに 1

1 「一九四〇年」の衝撃 3

2 戦後をつくった政治エリートたち 9

3 先行研究はどのようになされてきたか 12

4 戦後構想のなかのヨーロッパ統合 21

おわりに——国際秩序構想史という視点 23

第1章 英仏統合を模索したフランス

——幻の「特別な関係」——

はじめに 27

1 英仏統合構想の背景 33

2 英仏調整委員会の活動 44

3 急ごしらえの「英仏連合」案 51

おわりに 66

第2章 自由フランスの脆弱な基盤

——制度化をめぐる動き——

はじめに 69

1 敗北の結果としての「フランス」 72

2 制度化の萌芽 81

3 アメリカがヴェガンに寄せた期待 89

4 自由フランスにとってのアメリカ 99

おわりに 106

第3章 自由フランスの「運動」からの脱却

——制度化の進展——

はじめに 109

1 戦後に向けての懸念 112

2 大西洋憲章と自由フランス 115

3 戦後問題を研究するための委員会の創設 119

4 日米開戦と連合国共同宣言 122

おわりに 127

第4章 戦後構想と自由フランスの試練

はじめに 129

1 ヴェガン失脚後の米「仏」関係 131

2 連合国共同宣言への署名先送り 140

3 戦後構想に向けた研究 148

4 「フランス」をめぐる正統性の問題 155

おわりに 168

第5章 北アフリカの「フランス」

はじめに 169

1 第二戦線をどこに構築するか 170

第6章 「西ヨーロッパ統合」構想をめぐる政治

- はじめに 237
- 1 戦後に向けた研究の停滞 238
 - 2 戦後ヨーロッパをめぐる懸念 244
 - 3 三つの「西ヨーロッパ統合」構想 250
 - 4 「西ヨーロッパ統合」に対する外交方針 255
 - 5 ド・ゴールの外交論に対する反応 263
 - 6 「統合」の本格的研究とドイツ問題の論理 273
- 2 「不慮の存在」ダurlラン 177
 - 3 ダurlランの「フランス」 185
 - 4 ダurlラン暗殺 196
 - 5 ポスト・ダurlランをめぐる権力闘争 200
 - 6 新たな「フランス」の誕生をめぐる角逐 203
 - 7 優位に立ったド・ゴール 216
 - 8 新たな拠点としてのアルジェ 219
 - 9 ジローの失墜と安定に向かう「フランス」 227
- おわりに 234

終章 後味の悪い「勝利」

- 1 終戦へ 393
- 2 国際秩序構想史としての第二次大戦史 396
- 3 「状況対応型」外交による挽回 398

393

第7章 大國間協調体制への順応

- はじめに 319
- 1 フランスに求められる役割 323
- 2 普遍的国際機構の実現に向けて 336
- 3 フランスとダンバートン・オークス提案 345
- 4 フランスと「会議外交」への復帰 362
- 5 戦後国際秩序構想の終着点 370
- おわりに 391

319

- 7 ベルギー亡命政府との交渉 279
- 8 「西ヨーロッパ統合」構想に対する懸念 289
- 9 揺らぐ「西ヨーロッパ統合」構想 301
- おわりに 314

結 語
400

あ と が き
405

注

参 考 文 献

人 名 索 引

事 項 索 引

引用文のなかの「」は、引用者による補足である。

あとがき

本書は、慶應義塾大学大学院法学研究科に提出した博士論文「第二次世界大戦期フランスと戦後国際秩序構想——主権と統合をめぐる政治 1940—1945」(二〇〇八年一〇月一七日、博士(法学)授与)を大幅に加筆修正したものである。本書を執筆するに際し、次に記載する拙稿を参照した。

- ① 「第二次大戦期北アフリカにおける『フランス』と抵抗運動——ド・ゴールの権力基盤の確立、一九四三年」『法学政治学論究(慶應義塾大学)』第五五号(二〇〇二年冬季号)
- ② 「第二次大戦期の『西欧統合』構想と自由フランス(1943年—1944年)」『現代史研究』第五〇号(二〇〇四年一二月)
- ③ 「ジャン・モネと第二次大戦期『フランス』(1940年—1943年)」『日仏政治研究』創刊号(二〇〇五年九月)
- ④ 「自由フランスと戦後秩序をめぐる外交 1940—1944年」『国際安全保障』第三三卷第二号(二〇〇五年九月)

本書の出版企画が持ち上がり、実際に出版に至るまでかなりの時間を要してしまった。研究者として生きてい

くうえで、早い段階でいろいろなことに挑戦したいという思いに強く駆られ、フランスに留学し、二足のわらじを履くようになったのが遅延の大きな原因である。というのも、留学先のパリ政治学院では、本書で扱ったテーマとは別に「フランスと東アジア」という新たな領域に関心を抱き、あまり迷わずに専門研究課程、そして博士課程へと突き進み、結果的に異なるテーマを同時並行で研究するはめに陥ったからだ。自業自得とはいえ、膨大な時間を費やしたうえに、体力も消耗した。しかし、研究関心が散漫になったわけではない。異なるテーマを異なる方法論で扱ったものの、その背景にある「一九四〇年六月に敗れたフランスの再興をめぐる政治」という問題意識を念頭に置きながら研究する点では一貫していた。

いずれにせよ、日本とフランスを行き来していたわけであり、わがまま極まりない生活を送っていたということに懺悔しなければならぬ。破天荒な研究生活の日々を過ごすには、多数の方々の支えと励ましが必要であった。そして、多くの方にご迷惑をおかけしてしまったような気がする。これらすべての方々に謝意を表し、場合によってはお詫び申し上げたい。

その筆頭に挙げられるべきは、慶應義塾大学の田中俊郎先生である。私が同大学法学部政治学科の三年生であった一九九八年に研究会への入会をお許しただいて以来、長きにわたりご指導いただいている。田中先生には、大きく二つのことを学んだ。第一に、史料に基づく徹底した実証主義の大切さである。第二に、とはいいながらも「木を見て森を見ず」というような状況に陥ることなく、広い視野に立った研究を行うことである。実際には膨大な「史料の波」に飲み込まれることが多く、途方に暮れてばかりいた私だが、その都度、田中先生に教わったことを思い起こしながら奮起していた。

慶應義塾大学では、多くの先生方のご指導を賜った。赤木完爾先生の「国際政治基礎」は学部一年生の必修科目であったが、秋学期の木曜五限、すでに暗くなった日吉キャンパスの大教室で行われていた講義は週一度の楽しみであった。それ以来、赤木先生には折に触れて貴重なアドバイスを頂戴している。田所昌幸先生には、大学院に入

ってまもないうえに業績も皆無に近かった私を「ロイヤル・ネイヴィー研究会」にお誘いくださり、先生の研究室やご自宅で論文執筆の「いろは」を徹底的に教えていただいた。さらに、研究には学術的な「おもしろさ」が必要であることを教えてくださったのも田所先生である。私の兄弟子にあたる細谷雄一先生には、何とお礼を申し上げればよいのかわからないぐらい、公私にわたるアドバイスを頂戴し、いろいろと助けていただいている。これまで何度、細谷先生の叱咤激励に救われたことか。私が学部生の頃、水曜五限の「サブゼミ」で、当時、新進気鋭の大学院生であった細谷先生が溢れんばかりの知見で私たちの報告にコメントなさっていたのをいまでも鮮明に覚えている。

北海道大学法学部の遠藤乾先生には、まったく頭が上がらない。研究が行き詰まりがちであった私の相談に親身になって乗ってくださり、さらに、二〇〇八年には日本学術振興会の特別研究員（PD）として北海道大学大学院公共政策学連携研究部の研究室に受け入れてくださった。遠藤先生のご指導もあり、任期の三年間、札幌で最高の研究環境に恵まれ、特別研究員の任期が切れた後の二年間も協力研究員として研究を続けることができた。北大を拠点にしていた五年間は最も研究が進んだ時期である。

防衛省防衛研究所の立川京一先生にも研究面で多大な恩義がある。修士課程に在籍中であつた私は、初めてフランスに留学するのを前に、立川先生の研究室を訪問し、当時はフランス外務省の本省にあつた文書室での史料閲覧の方法について詳しく教わつた。いまから考えれば、自分で調べるべきであり、汗顔の至りだが、貴重なお時間を賜り、懇切丁寧に説明してくださった。深甚なる謝意を表したい。

その渡航先のフランスでは、まず誰よりも「フランスと東アジア」関連の研究テーマで指導を引き受けてくださったパリ政治学院のモリス・ヴァイス（Maurice Vaisse）先生のお名前を挙げなければならない。国際関係史の手ほどきを、その分野の泰斗から受ける機会を得た私は幸せであつた。そして、ヨーロッパ統合史研究の第一人者であるセルジー・ポントワーズ大学のジェラルド・ボッシュア（Gérard Bossuat）先生にも多くのことを教わつた。

パリ郊外のボシユア先生の研究室で、あるいは電話やメールでモネについて長時間にわたり議論を重ねることができ、これまた幸せであった。

さらに、これまで研究を続けてこられたのは、学会、研究会、その他の場で、多くの方々から激励やコメントを頂戴したからである。慶應義塾大学大学院に在籍中は、田中先生と細谷先生に加え、金子新、河越真帆、黒田友哉、合六強、小林正英、今野茂充、島田昌幸、清水唯一朗、白鳥潤一郎、鈴木均、鈴木宏尚、鶴岡路人、戸蒔仁司、西川賢、林大輔、東野篤子、福井英次郎など多くの先輩、同輩、そして後輩に恵まれた。北海道大学に身を置いていた時には、北大政治研究会や北大ドイツ史研究会で報告する機会を賜り、遠藤先生のほか、板橋拓己、権左武志、鈴木一人、空井護、中村研一、松浦正孝、山口二郎、山崎幹根、吉田徹をはじめとする先生方にコメントやアドバイスを頂いた。現在の勤務先である松山大学では、すばらしい研究環境のなかで、法学部法学科の先生方に大変お世話になっている。とくに伊藤信哉、遠藤泰弘、そして甲斐朋香の三名の政治学系列の先生方にいろいろと相談に乗っていただいた。

そのほかにも、これまでの研究生生活のなかで、数多くの先生方に非常に有益なコメントを頂いた。思い浮かぶだけでも、阿川尚之、飯田洋介、五百旗頭真、井上正也、上原良子、白井陽一郎、梅本哲也、大原俊一郎、小川浩之、片岡貞治、加茂省三、川嶋周一、川島真、木畑洋一、君塚直隆、葛谷彩、国分良成、小窪千早、小久保康之、小島真智子、佐瀬昌盛、庄司克宏、マチュー・セゲラ (Mathieu Séguela)、妹尾哲志、添谷芳秀、鳥潟優子、中島信吾、中西輝政、中村英俊、中山洋平、野澤丈二、服部龍二、濱口學、平野千果子、広瀬佳一、廣田功、廣田愛理、福田円、堀茂樹、松本佐保、水本義彦、宮城大藏、宮下理恵子、森田吉彦、安田佳代、柳田陽子、山口昌子、山本健、吉武信彦、渡邊啓貴といった先生方のお名前が浮かんでくる。

本書を執筆するにあたり、各地の史料館で保管されている一次史料の利用は欠かせなかった。それらの閲覧を許可されて初めて成り立つ研究であった。それゆえ、史料を見る際に手助けしてくださったフランスの外務省、国立

公文書館などのアーキビストや職員の方々に御礼申し上げたい。とくに、スイスのローザンヌ大学のキャンパス内にある「ヨーロッパのためのジャン・モネ財団」の故リイベン (Henri Ribben) 先生と同財団でモネの史料の管理を担当されていたニコッド (Françoise Nicod) 氏には、特別に感謝申し上げます。ローザンヌ大学が所有する古い趣のある建物のなかで、数回にわたり、モネの手書きの文書を見るという至福の時を過ごさせていただいた。

そして、大学で田中先生の下でもとに学んだ仲間にも常日頃からエネルギーをもらっている。とりわけ、貫井保芳、杉崎慎弥、須藤北斗、照屋裕一郎、そして近藤崇司の諸氏には本当に感謝している。フランスでは、留学生活を送るうえで、佐藤康司、坂川孝、鈴木真知子、そして前田茂樹をはじめとするさまざまな分野の第一線で活躍する方々との交流がどれくらい心強かったことか。住居探しから始まるパリでの生活は困難の連続で、決して楽しいことばかりではなかったが、私が小学生の頃から存じ上げている鈴木氏にはその都度多大なご支援を賜り、私の愚痴を辛抱強く聞いてくださっただけではなく、頻繁にご自宅やパリのレストランでご馳走してくださり、栄養失調にならずに無事留学を終えることができた。

なお、本書の基となる研究テーマを実施するにあたり、慶應義塾の小泉信三記念大学院特別奨学研究生として奨学金によるご支援を賜った。記して心より感謝申し上げます。

博士論文を提出してから本書が出版されるまで辛抱強く私を支え、良きアドバイスを惜しみなく提供したのは、勁草書房編集部の上原正信氏である。上原氏は慶應義塾大学大学院に同じ時期に同じ演習を履修した研究仲間でもある。忍耐強いうえに、人文・社会科学に造詣の深い上原氏の助けがなければ本書が日の目を見ることは決まらなかったであろう。心より謝意を表したい。

最後に家族に感謝の言葉を述べて本書を終えたい。研究とは決して孤立した状況のなかで続けられるものではない。とくに、日本とフランスを頻繁に行き来した私は尋常ではないほど自由奔放な大学院生であった。両親の松野和美、松野邦子、弟の松野次郎、さらに祖父母の宮下四郎、宮下泰子、松野清美、松野みつゑには大いに助けてい

ただいた。心より感謝申し上げたい。このうち父の松野和美、そして二人の祖父である宮下四郎と松野清美はもはやこの世にはいない。できれば彼らが存命中に本書を出版したかった。いまとなつては彼らの墓前に本書を捧げることぐらいしかできない。

二〇一六年二月二六日

宮下雄一郎